

かけがえのない日々

中山 晴美

(14-1, カンボジア, 体育, 小諸市立美南ガ丘小学校)

『出勤初日のできごと』

2002年9月2日(月)待ちに待った初出勤日。学校に着いたら数人の先生が出迎えてくれた。自己紹介をした後、早速活動の話になった。

半年程学校を離れていて、現場での活動を楽しみにしていた私にとって、いよいよ学校での活動が始まるということは何とも嬉しいことで、『あんなことがしたい、こんなことも・・・』とずっと頭の中だけで考えてきたことをやっとな發揮できる時がきたと正直わくわくしていた。その期待度が大きかっただけにこの後、校長先生から言われた言葉にショックを受けた。

「授業が始まる前の朝1時間と授業が終わった夕方1時間、球技の指導をしてほしい。彼らは希望者が集まって競技会に向けての練習をするのです。」

校長先生はとても早口で話したので、何かの聞き間違いかもしれないと思い、もう一度聞いてみたが間違いはなかった。そして、校長先生は更に話を続けた。

「去年まではバレーボールとサッカーしかなかった。それも男子だけ。もし、あなたがバスケットボールを指導したいのであれば、新しく生徒を募集しなければならない。もし、生徒が集まったら場所を見つけて練習をすればいい。バスケットボールがいい??女子生徒がいい??」

やはり、早口で説明され、最後に質問までされているが、頭の中が混乱していてその質問には答えられなかった。少し時間をかけて頭の中を整理して、私はやっとなそれが、いわゆる日本でいう部活動のようなものだとして解釈し、校長先生に『体育の授業』をやらせてほしいと伝えた。校長先生は私たちが話をしている部屋の壁に掲示してある時間表を指差して説明を続けた。クメール語で書かれた教科の一つ一つを説明しながら、結局は『時間割の中に体育の授業はない』ということ私に言いたかったのだ。最後に校長先生に「あなたの考えを聞かせてくれ」と言われたが、今の自分の気持ちをクメール語で正確に伝える自信がなかったので、明日説明をさせてほしいとお願いし、初出勤日の活動は終わった。

帰宅後、まず、ただ漠然としていた『あれもしたい、これもしたい・・・』という自分の考えを具体的にしなければならなかったと思った。現場の実態を見てから・・・とのんびりと考えていたが、現場の実態は私の考えとは全く違うラインにあることがわかった。現場の先生方の考えを大切にしなければならぬことも十分承知だが、『体育』というものに関して、この学校の先生方の考えはそれほど深いものではないと察したため、少し強引かもしれないが自分の考えを主張してみようと思った。

期待に胸を膨らませて学校に向かった初出勤の日の日記である。帰国してもうすぐ2年…カンボジアでの出来事が少しずつ美化され、楽しいことばかりが思い出されるようになってきている今でも、この日の大きなショックは忘れられない。

『相互理解と自己主張』

9月3日(火)校長先生に二つの考えを伝えた。

一つは、『体育の授業』として、全ての生徒が運動に触れられる機会を与えてほしい。特に普段運動をすることのない生徒に、体を動かすことの楽しさや良さ(健康)を伝えたい。そのため、今までなかった体育の授業を時間割に入れてほしい…ということ。二つ目は、競技会に向けての練習は、もちろん指導するが、何を指導するかは生徒の希望を優先させてほしい。バスケットボールをやりたいという生徒がいれば指導をするし、いなければ、バレーボールでも、あまり得意ではないがサッカーでも精一杯指導したいと思っている…ということ。

前の日に必死に調べたクメール語で話したので、うまく伝わるか心配だったが、校長先生は一生懸命に聞いてくれ、幾つも幾つも問答を繰り返しながら、私の考えを理解しようとしてくれた。校長先生の私に対する質問が的を射っていたので、しっかり理解してくれていると感じ嬉しかった。長い時間話した後、校長先生が言った「あなたの考えはよく分かった。10月(新年度が始まる)までに教頭先生や他の先生とも相談して考えてみる。また、いろいろ質問をするかもしれない」の言葉に安心した。

次の日、私は行動に出た。これからのカンボジアでの生活がこのままでは納得できないと考えたからである。

もし、日本にいたら…私は、決められた道を何の苦労もなく歩んでいただろう。生徒のことを一番に考えて、自分の意見を主張することなどなかったかもしれない。正直、日本ではそれが楽であり、そんなぬるま湯に浸かったような生活にも何の疑問も感じていなかったからである。

あえて、そこから抜け出して、伝わるかどうか分からない自分の意見を必死に伝え、何かを変えようとしている自分がそこにいた。新しい自分との出会いであった。

『いよいよ…これから！！』

10月1日の入学式を前に、職員全員が集まり職員会議のようなものが行われた。そこで、各学級の担任が発表されたり、校長先生のお言葉があったりした。改めて、私の紹介もしてもらい、簡単な自己紹介をした。最後に、各先生方の受け持ち授業の時間割表のようなものが渡され、解散となった。時間割表を手に先生方は一人、二人…と帰って行った。全ての先生にそれが渡り、後は私一人となった時、校長先生が私を呼んだ。校長先生の手元を見ると、きれいに作られた私用の時間割表があり、それを私に手渡ししながら説明してくれた。

結局、時間割の中に『体育』を入れることは、物理的に無理だったようだ。二部制ということもあり、時間に限りがあるためのようである。そんな中で、なんとか私の考えを尊重しようと、校長先生の出した結論は、午後授業を受けている生徒が午前中に、また、午前に授業を受けている生徒が午後、週1日学校へ来て『体育』の授業を受けるということだった。渡された時間割表には、月曜日から土曜日までの午前中毎日と、午後3日間の体育の授業がびっちりと入っていた。グレード7とグレード8の計16クラスを1日2~3クラスずつ受け持つということだった。

問題点はいくつかある。特に、私が一番に主張した『全ての生徒に・・・』という点で、週1日とはいえ昼食をはさんで2回学校へ来なければならぬことは、家が遠かったり、家の事情があったりする生徒にとっては困難であるように思われた。校長先生も、そこが一番の問題だと言っていた。しかし、始めてみなければ分からないこともある。私の授業の仕方によっては、全ての生徒の興味を惹くことだってできるかもしれないし、それに向けた努力も必要だと思った。やってみてから、生じた問題点をひとつひとつ解決していくことが今できることではないか・・・また、私の自分勝手な主張を快く理解してくださり、案をだしてくださった先生方の気持ちに対する誠意であるのではないか・・・と思い、この案で新年度を出発することにした。

結局、私の2年弱の活動は、最後までこの形で行われた。始めはやはり、体育の授業の必要性を生徒に理解してもらい、授業に出席してもらうことは難しかった。その頃は『焦るな・・・すぐに何とかなるものではない。長い目で理解してもらうことが大事！』『興味をもって足を運んでもらえさえすれば、生徒は日本もカンボジアも一緒・・・必ず体育の楽しさを分かってもらえるはず。』そう自分に言い聞かせて毎日を過ごしていた。

『生徒に支えられている私』

なかなか自分の思いが伝わらず、生徒も「暑い」「疲れた」「もう嫌だ」といっては、日陰で休んでしまったり・・・女子にいたっては、「運動の格好は恥ずかしくて嫌だ」と、スカートのままやってきたり、そんな日が続いていた。

今日も、少し落ち込んだり、いらいらしたりした気持ちのまま授業を終え、スタジアムの真ん中で一緒にやっているS先生とどうしたらいいか話そうとしていた。

S先生は、一応ブノンペンの体育教員養成学校を卒業してきているが、やはり、体育というものへの理解があまりないせいか、その先生自体の性格のせいか、自分でも「授業は好きではない」とか「生徒は怠け者だから嫌いだ」とか言っては、授業に遅れてきたり、時には授業時間にどこかへ出かけてしまったりする。

今日も、結局、二人の意見が合わず、話し合いというよりは 言い合いとなってしまった。その言い合いの中でもS先生は「生徒は怠け者だし、みんな運動が好きじゃないから仕方がない」といつものように生徒を悪く言うのだ。

ちょっといらいらしていたこともあり、私もつい、売り言葉に買い言葉で「私はそうは思わない。でも本当にそうだとしたら…運動が好きじゃない生徒がいるような学校で、私は働きたくない!」というようなことを言っていた。

結局、その話し合いは何の解決もされないまま終わり、そのS先生は帰ってしまったのだが、その後すぐに、その様子を見ていた生徒数人がやって来て、こう言った。

「先生、ぼくたちみんな運動大好きだよ。先生のこと大好きだよ。だから、他の学校に行くなんて言わないで…」

いくらいらいらしていたとはいえ、生徒を傷つけるような発言をしたことへの反省の気持ちと、生徒が言ってくれた言葉が嬉しかったことから、言い合いの時にはぐっとこらえていた涙が思わずあふれてしまった。生徒の気持ちは日本もカンボジアも一緒だと気づき、この生徒たちがいる限り、私はここでがんばっていける…と、そこで気持ちを新たにされた瞬間だった。

こんな出来事を繰り返しながら、私にも少し自信がつき、生徒たちに向き合う姿勢も変わってきた。そんな私の態度が、生徒たちにも伝わったのか、彼らの授業に向かう姿勢も変わってきた。結局、彼らは、今まで運動をすることの楽しさを知らされていなかっただけなのだ。それを、知らせてあげられる人がいなかっただけなのだ。

そこからは、そうやって目を輝かせて何かを求めている生徒たちに、私にできることをできるだけ伝えようと、たくさん考え、たくさん行動し、たくさん失敗もし、それでもほんの少しの手ごたえを大きな喜びに変えながら、カンボジアでの生活を満喫していった。

『通いなれた道』

私の家から学校まで自転車で約15分。何度この道を往復しただろう。暑い日も、雨の日も…時には抱えきれないほどの荷物を積んで…時には遅刻しそうになり猛スピードで…時には近所のパン屋さんで買ったパンをかじりながら…。

明日の帰国を前に、すでに授業を終了させた私は、家にこもって荷造りをしていた。ふと、なんとなく休日をはさんでここ2~3日、あの道を通っていないなあ…と思い、昼食をとりに出かけるついでにぐるりと遠回りをしていつもの通いなれた道を久しぶりに自転車で走ってみることにした。いつも、私の行動は思いつきだが、今回も本当に単なる思いつきだった。

すると、一人のおじさんが突然道に飛び出してきた『ネアックルー(先生)』と私を呼んだ。自転車を止め振り返ると、知らないおじさんが手を合わせながら、「家に来てほしい」というのである。その様子が、ただごとではないような気がして戻っていくと、どうやらそのおじさんは、私が教えている生徒のお父さんらしく、ずっと私のことを捜していたというのである。息子である生徒から私がもうすぐ日本に帰ると聞き、お土産を渡したいと思っていたのに、ここ何日か私がこの道を通らないので、もう日本に行ってしまったのではないか

と心配で、昨日も今日も朝からずっとこの道を通るのを待っていたのだというのだ。

『なんという……』単なる思いつきでふらっと出てきただけなのに、もし、私が今日もこの道を通らなければ、彼はずっと私がここを通るのを待っていたのだろうか……直接会って話したことがあるわけでもないこの私を……と考ただけで胸が熱くなった。そして、お土産をいただいて中を見てみると、生徒の名前と私のことが刺繍されたクロマー（カンボジアのスカーフ）だった。クロマーをいただくことは多いが、私のためだけに用意されたものをいただくのは初めてだったので『本当に私を待っていてくれたんだ……』と思いで、更に熱くなるものがあった。

そこからは、いつも通いなれた道なのに、あふれる涙とこんな出会いがあることへの感動で、ちょっと違う気分でペダルをふんでいた。

決していいことばかりではなかったけれど、カンボジアでの最終日のこの出来事で、すべてが素晴らしいものになってしまった。

カンボジアでの生活は、私にとって、多くの人と、多くの物と、多くの出来事と……そして新しい自分と出会えることのできた、かけがえのない日々であった。

国際教育協カシンポジウム 帰国隊員報告会



平成14年度1次隊
カンボジア 体育
中山 晴美
(長野県小諸市立美南ガ丘小学校)

発表内容

配属先の概要
配属先での活動
カンボジアでの生活
(帰国後の活動)
最後に・・・

配属先の概要



カンボジア国 シェム・リアップ州 教育・青年・スポーツ省
クメール日本友好 プレ・エンコーサ中学校

<生徒数> 約1400名
<教員数> 約 60名
<学級数> 22学級
(各学年7～9クラス)



<施設> 木造1階建
校舎は1995年に日本人の寄付に
よって建てられたもの
教室数 12



<履修教科>
クメール語 英語 フランス語
数学 科学 生物 地学 政治
歴史 地理等

午前・午後の二部制

配属先での活動



体力テスト

身長・体重
立位体前屈 柔軟性
反復横とび 敏捷性
腕立て屈伸 筋力
上体起し 筋持久力
5分間走 持久力
立ち幅跳び 瞬発力
走り幅跳び 跳躍力



体づくり運動



なわとび運動



保健指導



バレーボール (課外活動)



バスケットボール





カンボジアでの生活 ~ 余暇の過ごし方 ~



子どもたちの笑顔



カンボジア通信

日本の子どもたちとの接点



胡弓と陶芸



第一回 インターネットライブ交流会に向けて

カンボジアのことで知りたいこと
カンボジアの子どもたちに聞きたいことを
質問しよう

いつも
どんな遊びをして
いるのかな
僕たちとは違うのか
知りたい

カンボジアの小学生は戦争に
ついてどう考えているんだろう
そんなことを質問しても
大丈夫かな

クメール語を知りたい
あいさつ等は調べれば
分かるけど、みんなが
言われて嬉しいのはど
んな言葉だろう

インターネットライブ交流会



カンボジア
バットバン州
ワットカンペイン小学校
5・6年生

日本
長野県小諸市立
美南カ丘小学校
5年1組

第一回 インターネットライブ交流会を終えて

子どもたちの感想から

- ・言葉が違う国どうしの交流で伝えたいことが通じるかすごく心配だったけど、カンボジアから「よくわかりました」と言われたときはほっとしてうれしかった
- ・交流するまで、カンボジアの人は「かわいそう」と勝手に思っていたけど交流してみて印象が全然違った。仲間だと思った。
- ・「カンボジアに遊びに来たいですか」と質問された瞬間、私は心の中で「行きたい!」と叫びました。すごく離れていて会うことができないけど、本当はもっと話したいと思ったからです。
- ・「日本の経済が繁栄しているのはなぜですか」と質問され、はじめは意味さえ分からなかった。そんなことを知っていることに驚いた。日本に興味があるのかな? もっともっと日本のことを伝えたい。そのために自分たちが知らなければならぬことがたくさんあるような気がした。
- ・「私たち日本人が、カンボジアの国のためにできることはありますか」と質問した。どんな答えが返ってくるか楽しみだけど、ただ答えを待っているだけでなく、また、カンボジアについていろいろ調べて、次の交流までに自分でも答えを探しておきたいと思った。

第二回 インターネットライブ交流会を終えて

子どもたちの感想から

- ・ぼくは、ふだん機械ゲームで遊んでいることが多かったので、カンボジアの人の遊びを聞いておどろきました。枝・布・石などが、主な遊び道具になるなんて…。僕たちがふだん何とも思わない物で楽しい遊びになっているなんてびっくりしました。枝や石、布なども考えれば、楽しい遊びが他にもありそうな気がして、思うだけで楽しくなりました。僕も、カンボジアの遊びをやってみたくなりました。カンボジアにますます行ってみたいくなりました。
- ・「今の生活に満足していますか」という質問の答えで、「とても満足している」と言っていてすごいなぁと思いました。私は、あらためて、「日本人はすべてのことにげいたくすぎる」と思いました。私だったら「とても満足だ」なんて言えないかもしれません。
- ・ぼくは、カンボジアの人に戦争について質問をしました。でも、ぼくはこの質問をするのがいやでした。どうしてかというのではないかと考えたからです。でも、オーイ・ソクンティアーさんは、堂々と「カンボジアの人はもう戦争をする必要はないと考えている」と答えてくれました。僕はそのことがうれしかったです。
- ・「いわれて嬉しい言葉」は、私なら「ありがとう」とか「上手だね」とか自分をほめてもらうような言葉だと思うけど、返ってきた答えは「家族がずっと幸せでありますように」といった。家族や他の人を思う言葉だった。カンボジアの人は、家族や友だちを大事にしているんだなぁと思いました。

示唆されたこと

子どもたちは、この交流を通して今まで知らなかった国のことについて知ると共に、今自分の生活している日本という国について振り返り、その良さを改めて深く知ること、より深く広く人や物事に関わっていかうとするのではないか…

